

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (2)

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安樂氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ教会総会長兼協会長として出発するつもりです。

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面の都合上、文字数の制限があるために、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp)」をご覧くださる。(教会成長研究院)

注・本文中、真の父母様のみ言は「青色」で色分けしています。

(5) 李鎬宅氏の言説「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続することについて書かれていない。真のお母様は、女王ではありません」の誤り

李鎬宅氏は「聖書の中に、メシヤが亡くなった後で、女性が相続することについて書かれていない」と述べます

が、このような主張は、聖書に対する「無知」が生み出した誤りです。

聖書には、イエス様が十字架で亡くなった後、霊的母である「聖霊」(参照、『原理講論』二六五ページ)が信徒たちを導いていくことについて記されており、しかも「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言ったことができない」(コ

リントー二・三)とあります。このように、十字架の後、霊的母である聖霊が、信徒を導いてきたのです。

「父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであらう。……助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであらう」(ヨハネ一四・16〜26)

イエス様の預言どおり、ペンテコステの日に聖霊が降臨し、それ以降、イエス様と共に聖霊がクリスチャンを導いていくようになりました。

「原理」が教えているように、クリスチャンは霊的母である「聖霊」を通じてこそ「霊的重生」ができるのです。

前述したように、聖書には、「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言ったことができない」とあり、さらに「聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである」(アトス三・5)とも書かれています。

このように「重生」の役事は、真の父だけで成されるのではなく、必ず真の母を通じなければなりません。ゆえに、イエス様は、「人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであらう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」(マタイ二・32)と警告しておられます。真の母を重んじなければならぬのです。

真の母を復帰することができませんでした。真のお父様は次のように語っておられます。

「イエス様も、もし結婚して相対理想を成していたならば、亡くなられたりはしませんでした。殺すことはできないというのです。これは、相対理想の直接主管圏に連結することができ、原理で言えば、責任分担を完成した基準になるので、直接主管圏内に入っていくのです」(『ファミリー』二〇〇一年三月号、二二ページ)

イエス様は、地上において「真の母」を立てることができず、十字架で亡くなりました。そのため、原罪を清算する道を開くことができませんでした。そして、十字架と復活の後、霊的母である聖霊と共に「霊的重生」の役事だけを行うようになったのです。新約時代は、霊的救いのみで終わりました。

しかし、再臨主であられる真のお父様は、実体の「真の母」を復帰され、原罪を清算する道を開かれました。それゆえ、成約時代、天(てん)国時代を迎えることができたのです。「重生」の役事をなすうるおかたは、文鮮明・真のお父様と韓鶴子・真のお母様 以外にはおられません。

また、真のお父様は、「皆さん、男性に尋ねれば『王になりたい』と答え、また女性に尋ねれば『女王になりたい』と答えるでしよう? いったいそれはどつうことでしょうか。本来のアダムとエバは、王であり、女王だったといつことですか」(八大教材・教本『天聖經』二二二〇ページ)と語っておられ、完成したアダムが「王」であるなら、その相対であるエバは「女王」であると語っておられます。李鎬宅氏の言説は、真のお父様のみ言や聖書の教えと食い違っていることが分かります。

(6) 李鎬宅氏の言説「お父様が二〇一三年一月十三日を基元節に定めた理由は、アダムからノアの洪水審判までが千六百五十六年であり、その年数に韓国歴史の檀紀をプラスすれば、六千一年になるからだ」の誤り

李鎬宅氏は、聖書に出てくる千六百五十六年の年数と、韓国歴史の檀紀四三四六年(西暦二〇一三年)をつなぎ合わせて計算し、人類歴史は二〇一三年をもって六千一年になる。それゆえ、真のお父様は二〇一三年を「基元節」に定めたのだと主張します。しかし、これは「木に竹を接ぐ」ような言説であり、歴史の進展には、人間の責任分担が関わっていることを無視した、誤った言説です。

ノアの洪水審判までの千六百五十六年と、檀紀の四三四六年を足して、人類歴史が六千一年の復帰摂理の終わりを迎えるというなら、二千年前、イエス様が

地上で「真の母」を復帰できず、勝利できないことが初めから決定されていたと言わなければならない。そこには、人間の責任分担があったのであり、当時のユダヤ民族が責任を果たせば、イエス様が十字架で亡くなることはなかったはずで。

ところで、十八世紀頃までの時代は、聖書に記された年数をそのまま信じ、それに基づいて人類歴史を考察する、いわゆる「聖書年代学」が盛んでした。英国国教会のジェームス・アッシャー大主教は、聖書の年数計算に基づいて「天地創造はBC四〇〇四年である。ノアの洪水はアダムから千六百五十六年である」と計算し、人類歴史を約六千年と主張しました。しかし、その年数計算は、イエス様の死後、約六十年を経たAD九〇年頃のヤムニヤ会議で定められたヘブライ語正典に基づいて計算された年数にほかなりません。実は、イエス様当時の初代教

会で広く読まれていたギリシャ語訳の旧約聖書「七十人訳聖書」の年数表記は、ヘブライ語正典とは異なっており、アダムからノアまでが二千二百五十六年となっていました。この七十人訳聖書の流れを汲むのが、カトリック教会の聖書です。

シトー派修道会の院長を務めたポール・ペズロンは、この七十人訳聖書の年数に基礎を置いて、アダムからイエス様までの歴史を五千八百七十三年と計算しました。七十人訳聖書では、アダムからイエス様までで約六千年となっていたのです。

ところで、真のお父様は、聖書の約六千年という年数表記に対し、何度も次のように語っておられます。

「人間が墮落してから今に至るまでの救援摂理歴史というものは、六千年ではありません。何千万年です。そのことを知らなければなりません」『ファミリ

』二〇〇一年八月号、八ページ

真のお父様が、「人類歴史は六千年ではない」と語られたみ言は数多くあります。六千年ではないと何度も強調して語ってこられたお父様が、聖書に書かれたアダムからノアの洪水審判までの年数の千六百五十八年と、檀紀四三三四年という端数のある数字を合算し、あえて六千年という数字にこだわって「基元節」を決められたと主張するのは、実に奇妙な話であると言わざるをえません。

ところで、真のお父様は、二〇〇四年七月八日の第九回「安侍日」に、次のように語っておられます。

「イエス様が失敗していなければ、イスラエル国を立てていたのと同じように、先生が生涯を通して、境界線を解放しておかなければなりません。しかし、今(数えの)八十五歳ですが、

八十歳でカナンを復帰して天下

統一をしなければならなかったにもかかわらず、それができなかったのです。……またアベル・カインが残っているので、第二次の祝福を受け、アベル・カインの撤廃を宣布したのです。そして、今から百二十年(百二十歳)になる時まで、すべてを終えなければなりません。……それを掌管する先生は、最初の四十年、八十歳までの四十年、今の四十年を、それぞれ四十年として、二〇〇二年から二〇一二年まで、九十二歳を中心とする二〇一二年までにすべてを終えるのです」(『後天時代と真の愛の絶対価値』二三五ページ)

このみ言で分かるように、本来、二〇〇〇年までに終えるべきだった摂理を終えることができなかったため、一九二〇年から六〇年までの四十年を第一次四年路程とし、次に一九六〇年から二〇〇〇年までの四十年を

母となりました。ですから、絶対的な父母を再び探し出さなければ、神様の創造理想を実現することはできません。このような論法に照らしてみれば、愛し合う新郎と新婦を中心とした真の家庭、真の理想国家、真の理想世界をつくろうという内容を教えてくれる宗教でなければ、真の宗教ではありません。真の宗教とは、真の父母が現れなかったので、真の父母が現れてこそ、真の家庭を築くことができるといふ理論をもった宗教です」(一九九四年二月十四日)

「人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり、国家の願いであり、摂理の願いです。ですから、そのような真の父母が現れるときは、歴史上で一度しかない定点をなす時であり、空前絶後の時なのです」(八大教材・教本『天聖經』二〇〇三ページ)

「人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり、国家の願いであり、思想の願いであり、摂理の願いです。それで真の父母が現れる時は歴史上に一度しかない頂点を成す時であり、空前絶後の時なのです」(同、三四一〜三四二ページ)

「真の父母は、永遠に一組しかいません。アダムとエバ、最高の先祖は、一組ではなく、一人の女性と一人の男性です。彼ら人間の先祖が真の父母にならなければならなかったのですが、墮落することによって偽りの父

第二次四年路程とし、さらに二〇〇一年から二〇四〇年までの

四十年を第三次四年路程として、失敗も延長もなかった基準を蕩滅(とうめつ)復帰することを目標に設定されたのが、二〇一三年(天暦)一月十三日の「基元節」です。すなわち、二〇〇一年一月十三日の「神様王権即位式」から二〇一三年(天暦)一月十三日までの十二年を経て「基元節」を迎えるというのが、真のお父様ご自身の説明です。

李鎬宅氏の語る摂理観は、真のお父様のみに根拠を持たない誤った摂理観です。

(7) 李鎬宅氏の言説「お父様が清平の二百十代の先祖解怨を指示されたのは、洪水審判まで二百十代になるからだ。アダムまで遡ると二百二十代にしかないのに、清平が四百二十代の解怨を推奨するのはおかしい」の誤り

のであって、真の父母様が子女様に合わせるものではありません。李鎬宅氏の言説は、人類が「真の父母」を中心に永遠に一つになっていこうとする道を阻んでしまふ、偽りの言説と言わざるをえません。

また、真のお父様ご自身は、復帰摂理の完成を「自分一代で成し遂げなければならない」と語られ、そのみ言のとおり、二〇一〇年天暦五月八日と同月十五日の二度にわたって米国・ラスベガスで、真の父母様の「最終一体」を宣布しております。そして、聖和(せいわ)される際には「全て成した」と宣布しておられます。

それにもかかわらず、李鎬宅氏は、まるで真のお父様が使命半ばにして、未完のまま聖和されたかのように主張しています。私たちは、李鎬宅氏が説くような「偽りの言説」に惑わされないうようにしなければなりません。

李鎬宅氏は、聖書に記された年数を文字どおり信じる立場から、アダムまで遡(さかのぼ)っても二百二十代にしかならないのに、清平(韓国)が四百二十代の先祖解怨を推奨しているのはおかしいと述べ、清平役事を批判します。しかし、前述したように、真のお父様は、人類歴史は六千年ではないと明確に語っておられます。

真のお父様が、人類歴史は六千年ではなく、実際はもつと長い年月であると語っておられることから考えれば、四百二十代の先祖解怨を推奨することは、何らおかしいことではありません。

ところで、李鎬宅氏は、文章進様こそが摂理の中心存在であるかのように主張しています。しかし、人類歴史における永遠の中心存在は「真の父母」です。真のお父様は、次のように語っておられます。